

## 調 査 資 料

### 六国後半に見る飢と疫と災

——平安時代初期における庶民生活の生活衛生学的概観——

浅見 益吉郎\*, 新江田 絹代\*

On starvations, epidemics and disasters, revealed  
in the later compilations of “Rikkokushi” series

—A hygienical aspect of folk-livings at the early days  
of “Heian-era” (792~887) —

Masukichiro Asami\*, Kinuyo Nieda\*

#### I は じ め に

さきに筆者らの一人(浅見)は、奈良時代を完全に包括する続日本紀(以下“統紀”と略記)の記事を通覧し、文武天皇二年より延暦十年に至る95年間(698~791)\*<sup>1</sup>(以下この期間を本報では“前時代”と呼ぶ)に発生した“飢饉ないし凶作”<sup>2</sup>、“疫病”ならびにこれらと関連が深かったと思われる“各種災害”<sup>3</sup>(以下これらを単に“飢”、“疫”ならびに“災”と呼ぶ)の記録を及ぶ限り拾摘し、飢・疫・災3者間の相互関係を検討すると共に、当時の庶民生活に対する生活衛生学的側面よりの概観を試みた<sup>1)</sup>。その結果として、華やかに彩られた天平文化の底辺に、絶え間ない飢・疫・災の脅威に打ちひしがれていた当時の庶民の悲惨な生活実態や、苛酷な誅求のみを事とし、救荒、防疫ないし防災にほとんど為す術を知らなかった権力者の無能ぶりを、ある程度まで客観的に把握することができたと考えている。

これを承けた作業として、筆者らは統紀に続く六国史後半の4史書(“日本後紀”、“続日本後紀”、“日本文徳天皇実録”および“日本三代実録”、以下これらを“後紀”、“続後紀”、“文実”および“三実”と略記)により、これらの編年史書が包括する延暦十一年(792)

より仁和三年(887)に至る96年間に発生した飢・疫・災の記録を、前報と同一の手法をもって集計処理し、これにもとづいて平安時代初期における庶民の生活像を生活衛生学的観点よりうかがう試みを企てた。以下にその結果を報告する。

根拠とした各史書はいずれも“新訂増補国史大系本”<sup>2)</sup>である。しかしながらこの時期の冒頭41年間に綴じた後紀・40巻は疾く散佚し、辛うじて10巻だけが伝存されているに過ぎない。従ってその欠巻部の空白を完全に埋めることは不可能であるが、この期間の記録の渉索は、かつて佐伯有義が丹念綿密に他の史書より採録、編纂した“日本後紀逸文”<sup>3)</sup>に拠り、必要に応じ“類聚国史”<sup>4)</sup>(以下“類史”)、“日本紀略”(以下“紀略”)<sup>5)</sup>ならびに“平安通志”<sup>6)</sup>なども参照して補訂した。

#### II 平安初期における飢・疫・災

各根拠史書に記載された飢・疫および災の発生記録数を地方別にもれなく拾摘して集計したのが表1である\*。

さらにこれらの数値を前報で報告した前時代の数値と道別に比較すれば表2のとおりである\*<sup>5</sup>。

これらの表を通覧してまず注目されるのは飢の発生記録が飛驒を除くすべての国にわたっており、その件数も前時代より大巾に増加している点である。

\* 衛生学第1研究室(Laboratory of Hygiene, I)

表1 六国史（後半）に記載された国ごとの飢・疫・災に関する記録数

道名	国名	飢(凶)	疫	災				道名	国名	飢(凶)	疫	災			
				旱	風(雨)	震(火)	虫害					旱	風(雨)	震(火)	虫害
畿内	平安京 <sup>1</sup>	63	16	47	115	8	0	山陰道	丹波	7	0	1	0	0	0
	山城	13	0	40	32	3	1		丹後	7	1	1	3	0	0
	大和	13	2	37	31	0	1		但馬	3	0	0	1	0	0
	摂津	13	0	20	16	0	0		因幡	8	1	0	0	0	0
	河内	14	0	19	19	0	0		伯耆	9	2	0	1	0	0
	和泉	9	1	16	14	0	0		出雲	6	1	1	1	1	0
東海	志摩	2	1	0	0	0	0	山陽道	石見	9	0	0	1	0	0
	伊勢	9	1	0	5	0	1		隠岐	1	0	0	0	0	0
	尾張	7	0	1	5	0	0	南海道	播磨	5	1	0	0	1	0
	三河	3	1	1	0	0	0		磨前	6	1	2	0	0	0
	遠江	3	2	1	1	0	0		備前	7	1	1	0	0	0
	駿河	1	0	0	0	3	0		作中	5	1	1	1	0	0
	伊豆	2	0	0	0	3	0		備後	10	1	0	0	0	0
	甲斐	3	1	0	0	2	0		備安	7	2	2	1	0	0
	相模	3	0	0	0	3	0		芸防	5	1	0	0	0	0
	安房	2	1	0	0	1	0		周長	5	2	2	0	0	0
	上総	2	1	0	0	1	0	西海道(大宰府管下)	紀伊	8	0	0	0	0	0
	下総	6	0	2	1	1	0		路波	16	0	0	1	0	0
	常陸	2	1	2	1	3	0		阿波	7	1	0	1	0	0
	武蔵	5	0	1	3	2	0		讃岐	5	0	1	1	0	0
									伊予	4	0	0	0	0	0
									土佐	5	0	0	0	0	0
東山道	伊賀	9	1	0	2	0	0	西海道(大宰府管下)	対馬	3	2	1	4	0	0
	近江	8	1	1	0	1	0		岐前	4	2	1	4	0	0
	美濃	8	3	0	0	0	0		筑後	5	3	1	4	0	0
	飛騨	0	0	0	0	0	0		筑前	4	2	1	6	0	0
	濃信	2	0	0	0	1	0		肥前	6	2	2	5	1	0
	上野	2	0	0	0	1	0		肥後	5	2	1	6	3	0
	下野	1	0	0	1	1	0		豊前	3	2	1	5	0	0
	奥羽	6	1	0	1	1	0		豊後	6	2	1	4	0	0
北陸道	陸奥	5	1	1	0	2	0		日向	3	2	1	4	0	0
	佐渡	1	1	0	2	0	0	合計	摩隅	5	2	1	5	3	5
	越後	5	1	0	0	1	0		薩摩	3	2	1	5	0	2
	中能登	6	0	1	0	1	0		大隅	1	2	1	1	0	0
	加賀 <sup>2</sup>	3	2	1	1	0	0								
	越前	6	0	1	0	0	0								
	若狭	5	0	1	0	0	0								

国名注・1：延暦十三(794)長岡京より遷都，2：弘仁十四(823)越前より分立，3：天長元(824)大隅に併合

疫については、記録数の上ではほぼ半減しているが、後述のように、平安時代に入って庶民の生活衛生環境が決して好転したわけではなく、むしろ各種疫疾の蔓延による打撃は前時代より一層深刻化したと考えられる。

災についても同様で、生活環境を支配する自然条件は前時代にも増して苛酷となった感がある。

さらに目立つのは、飢・疫・災ともに平安京を中心とする畿内諸国の発生件数が圧倒的に多く、この傾向が前時代より一層強まっている点であるが、これに関

表2 飢・疫・災発生比率(件数)の前時代との比較

	飢		疫		災	
	698~791	792~887	698~791	792~887	698~791	792~887
畿内	17.84% (66)	28.47% (125)	20.91% (32)	23.46% (19)	43.29% (168)	70.66% (419)
東海道	17.03 (63)	11.39 (50)	11.11 (17)	11.11 (9)	10.82 (42)	7.42 (44)
東山道	9.19 (34)	9.34 (41)	9.80 (15)	8.64 (7)	7.73 (30)	2.19 (13)
北陸道	3.24 (12)	6.83 (30)	4.58 (7)	6.17 (5)	2.06 (8)	1.85 (11)
山陰道	10.00 (37)	11.39 (50)	7.84 (12)	6.17 (5)	3.61 (14)	1.85 (11)
山陽道	13.51 (50)	11.39 (50)	13.07 (20)	12.35 (10)	8.25 (32)	1.85 (11)
南海道	14.86 (55)	10.25 (45)	13.72 (21)	1.23 (1)	7.99 (31)	0.67 (4)
西海道	14.32 (53)	10.93 (48)	18.95 (29)	30.86 (25)	16.24 (63)	13.49 (80)
合 計	99.99 (370)	99.99 (439)	99.98 (153)	99.99 (81)	99.99 (388)	99.98 (593)

( ) 内は件数

しては後に詳述したい。

表3は各史書に記録された飢・疫・災の件数を年次ごとに集計したものを左欄とし、小鹿島<sup>7)</sup>、中島<sup>8)</sup>、富士川<sup>9)</sup>らの著書が指摘している飢・疫・災年と、筆者らが各史書の記述内容より推察して判定した豊年および飢・疫・災年を、それぞれ記号で表示して右欄に併記したものである\*6。この表と同一手法で作製して前報に掲載した前時代の年次別発生件数表とを対比してみても、平安初期に至って庶民の生活衛生状態が改善されたと見做される点の一つとして見出し得ない。

### Ⅲ 考 察

#### A 平安時代初期の生活衛生学的概観

いうまでもなく、平安京は桓武帝が前時代の沈滞腐敗し切った民心と不穏な政情を一新する目的で、山河襟帯、交通要衝の地であった山城盆地を相し、雄大な経略と構想のもとに建設されたものである。その後帝都として千余年の命脈を保ち得たこの新京への遷都は、確かに歴史を画するに足る壮挙ではあったであろうが、本報が対象とする9世紀末までのその初期は、政治体制として前時代からの律令制を踏襲し、むしろその整備、強化に力が注がれていたもので、少なくとも民政の

部面には本質的な革新意欲を汲みとることができない。従ってこのような体制下に組み込まれた当時の庶民も、実質的に前時代と全く変らない劣悪な生活環境に呻吟するのを余儀なくされていたといえよう。筆者らの調査結果でも、総括的に見て当時の庶民の生活環境や生活水準は前時代と較べて向上どころか、いくらか低下した傾向さうかがわれる。

このことは小鹿島の調査結果<sup>10)</sup>に基いて作成した表4を見ても明らかである。すなわち本報の調査期間にほぼ匹敵する2つの半世紀間(791~840と841~890)において発生した各種災害発生件数の、全有史期(小鹿島が調査した391~1890年の1500年間)を通じての総発生件数に対する千分比はきわめて高く、この2半世紀間における各種災害の発生係数(B:表注参照)のほとんどは前時代を上廻り、この時期がわが国の全有史期を通じて、最悪の生活環境状態に置かれていたことを物語っている。

ことに新都の経営と辺境の治安維持のために桓武帝以降、歴代の政権が負った財政的負担は、民力の根底を揺がすほど深刻なものであったと考えられる\*7。

#### B 飢について

表3 年代順に見た飢・疫・災の記載数と推察されるその程度

西 暦	年号	天 皇	史 書 名	国別延件数				飢・疫・災年				西 暦	年号	天 皇	史 書 名	国別延件数				飢・疫・災年			
				飢	疫	災		小鹿島	中島	富士川	筆者ら					飢	疫	災		小鹿島	中島	富士川	筆者ら
792	延暦十一	桓	日	1	0	1					▲	841	承和八	仁	続日本後紀	2	0	3		●	▲		●
793	十二			0	0	1					▲	842	九			1	1	9		●	▲		●
794	十三			0	1	1	■		■		■	843	十			24	0	0		●	■	■	●
795	十四			0	0	2		▲			■	844	十一			2	0	2		●			▲
796	十五			4	0	9	●	▲			●	845	十二			1	0	10					
797	十六			0	0	2		▲			▲	846	十三			1	0	2		●			
798	十七			11	0	2	●	▲	●		●	847	十四			1	0	3		●	▲		●
799	十八			1	0	15	●	▲	●		●	848	嘉祥一			6	0	11		●	▲	●	▲
800	十九			33	0	6	●	▲	●		●	849	二			2	1	2		■	▲	■	●
				0	0	2		▲			●	850	三			2	0	8		▲			▲
801	廿一	武	本	0	0	6					●	851	仁寿一	文	文徳実録	7	0	9		●	▲	●	●
802	廿二			42	0	2		▲			●	852	二			9	1	8		●	▲		●
803	廿三			0	0	6					●	853	三			2	2	0		■		■	■
804	廿四			5	0	6	●	▲			○	854	齊衡一			3	1	3		●			
805	廿五			6	0	6	●				●	855	二			2	0	2		▲			●
806	大同一			40	12	32	○	▲			○	856	天安一			0	0	2		▲			
807	二			1	0	1		■	■	■	■	857	貞観一			0	0	1		▲			
808	三			13	6	5		■	■	■	■	858	二			1	0	36		▲	●		▲
809	四			3	0	5		■	■	■	■	859	三			1	0	16					▲
810	弘仁一			17	0	1	●		●		○	860	四			1	0	4		■	▲	■	■
811	二	嵯	後	2	0	1		▲			○	861	三	清	三	2	1	3		●	▲	■	▲
812	三			2	0	7		▲		■	○	862	四			0	1	4		●	▲	■	■
813	四			2	0	12		▲			○	863	五			4	3	8		●	▲	■	■
814	五			4	0	8					○	864	六			1	2	3		●	▲	■	■
815	六			12	0	4	●	▲			○	865	七			1	0	6		●	▲	■	■
816	七			1	0	3		▲			○	866	八			13	4	14		●	▲	■	■
817	八			3	0	3	●	▲			○	867	九			0	0	3		●	▲	■	■
818	九			2	0	13		▲			○	868	十			1	0	6		●	▲	■	■
819	十			7	0	5	●	▲	●		○	869	十一			1	0	8		●	▲	■	■
820	十一			6	0	2	●	▲			○	870	十二			4	1	7		●	▲	■	■
821	十二	淳	紀	0	0	6					○	871	十	和	実	1	0	12		▲			▲
822	一			2	1	6	●	▲		■	○	872	十一			2	1	10		▲		■	▲
823	二			6	8	7	●	▲	●	■	○	873	十二			4	1	8		●	▲	■	▲
824	天長一			5	2	1	●	▲			○	874	一			1	0	6		●	▲	■	▲
825	二			0	0	0					○	875	二			0	0	6		●	▲	■	▲
826	三			4	1	1		▲		■	○	876	三			4	2	4		●	▲	■	▲
827	四			0	0	3		▲			○	877	元慶一			6	0	13		●	▲	■	▲
828	五			1	0	4		▲			○	878	二			11	0	15		●	▲	■	▲
829	六			1	0	6		▲		■	○	879	三			1	1	4		●	▲	■	▲
830	七			4	14	2	●	▲		■	○	880	四			0	0	13		▲			▲
831	八	仁	続日本後紀	4	1	0	●	▲	●		○	881	五	成	光孝	1	0	2		▲			
832	九			4	1	10	●	▲	●	■	○	882	六			1	0	1		▲			
833	十			6	2	3	●	▲	■	■	○	883	七			2	0	8		●	▲	●	
834	承和一			6	2	16	●	▲	■	■	○	884	八			1	0	10		●	▲		▲
835	二			8	1	6	●	▲	■	■	○	885	仁和一			1	0	5		●	▲		
836	三			11	2	9	●	▲	■	■	○	886	二			1	0	5		●	▲		
837	四			7	1	5	●	▲	■	■	○	887	三			1	0	5		●	▲		
838	五			15	0	7	●	▲	■	■	○					1	0	3		●	▲		▲
839	六			1	0	10	●	▲	■	■	○												
840	七			3	1	6	●	▲	■	■	○												

記号, ○: 豊年 {●: 大飢(凶)年 {■: 大疫年 {▲: 大災年  
 {●: 飢(凶)年 {■: 疫年 {▲: 災年

本報の対象とした平安初期は、全期間を通じて庶民が最も飢にさいなまれた時代といえよう。とくに 830 年代前後はその頂点をなす感があり、疫・災の困苦も重なって、都鄙を問わず惨憺たる状態に置かれ、京中でさえ飢病者の死骸が野晒しのまま放置されていたこ

とが記述されている\*8。

政府は中央、地方を問わず、飢疫に際して常に租調を減免したり、その安易な施行は戒めつつも\*9 糧食や医薬を賑給するなど、種々の対応策は講じているが、何分累年の凶作や兵乱に財政が乏しく、しばしば肝腎

表4 9世紀当時の各種災異発生の千分比（小鹿島<sup>9)</sup>の資料による）

年 紀		延暦十～承和七	承和八～寛平二	計(A)	発 生 係 数(B)	前時代 (691～790) の発生係数 <sup>1)</sup>
西 暦		791～840	841～891			
災	飢 饉	120.00	120.00	240.00	3.600	3.000
	疫 癘	67.41	52.43	119.84	1.798	2.191
	旱 魃	83.83	83.83	167.66	2.515	1.976
	大 風	30.82	78.77	109.59	1.644	0.976
	霖 雨	44.12	169.11	223.25	3.349	1.434
	洪 水	25.06	59.23	84.29	1.264	0.376
	地 震	77.49	282.16	359.65	5.395	0.899
異	噴 火	19.74	39.47	59.21	0.888	0.296
	火 災	14.78	35.62	50.40	0.756	0.101
	海 嘯	17.86	17.42	35.28	0.529	0.536

表注：100年間の平均千分比 (T)=1,000×100/1,500=66.667, B=A/T.

の救恤原資にも事欠く有様であった。窮余の策として、富農の私穀を借貸したことも数回記録されているが、結果的には彼等を一層肥らせて貧富の較差を拡げるばかりであった<sup>\*10</sup>。また 備荒の目的で既に前時代から定められていた義倉の制度も、納入義務を怠る官人が多く<sup>\*11</sup>、その機能を十分発揮したとは認め難い。さらに、京中に常平所を設けて官米の放出をはかったことも記されているが<sup>\*12</sup>、以後の米価の安定に何程役立ったのか知るところがない。遂には国家の基本資産

ともいふべき不動倉の在庫米まで急場を凌ぐために流用しなければならない破目に陥り<sup>\*13</sup>（もっともみだりに不動穀を流・転用することを厳しく警告してはいるが<sup>\*14</sup>）、民心は益々荒廃して治安は乱れ（承和五年（838）以降、群盗横行の記事は枚挙にいとまがない）、窮極的に形骸化した律令制の矛盾を露呈してその崩壊を招いたものと考えられる。

表3において、延暦廿三年（804）以降前後7回にわたり、一応豊作年と判定したのは、いずれもその年

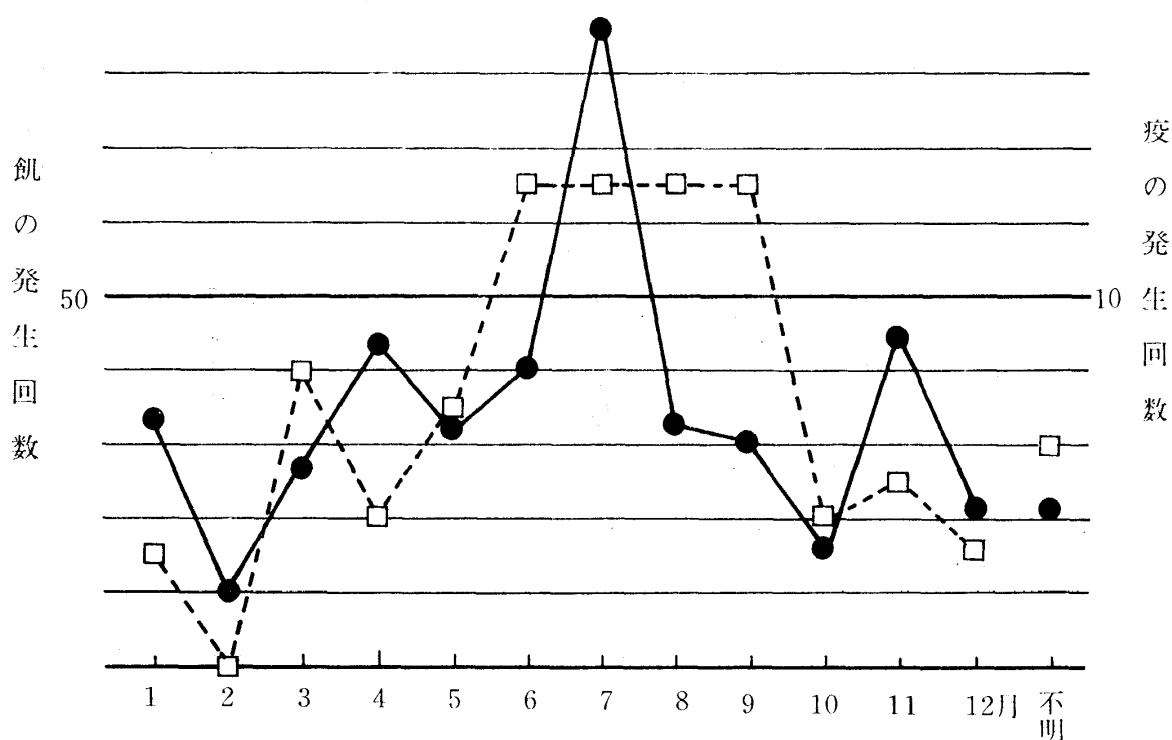


図1 各史書に記録された飢(●)および疫(□)の月別発生数

に豊稔を嘉祝する詔勅が下されたり、諸神への報酬が行われているからであるが<sup>\*15</sup>、これらが真の意味で、稔り多い豊饒年であったか否かについては疑念が多い。と言うのは、いずれの“豊年”にもその翌年に早くも飢凶による賑給が行われている有様であり、飢の発生が同時に記載されている豊作年（大抵は収穫以前の絶糧状態に因るものであるが）さえ少なくないからである。恐らくこれらの史書にいう“豊稔”とは今日のいわゆる“平年作”が全国的に大過なく確保できた程度の作柄を指すのではなからうか。

図1は全調査期間を通じての飢および疫の月別（太陽暦による、次の図も同じ）発生件数を示すものである。収穫以前の夏季に絶糧による飢の発生が多くてもあえて異とするに足りないだろうが、収穫直後の秋から冬にかけても決して少なくないのはどのような理由によるのか、更に検討を要すると考える。

### C 疫について

前述のように、疫に関する国別記録数は前時代よりかなり減少してはいるが、各史書の記載内容を詳細に検討すればその惨状は目を覆うばかりで、一々の国名を列挙する煩に堪えないほどの猖獗年が多かったことを物語っている<sup>\*16</sup>。とりわけ大同三年（808）の疫害は想像に絶し、藤原緒嗣は「当今天下困<sub>レ</sub>疫、亡歿殆半」（後記・十七）と述べている程である。文字どおりに人口が半減までしなかったとしても、京中をはじめ全土にわたって無数の疫死体が路傍に放置され、地獄図絵さながらの状を呈していたことは容易に想像し得る<sup>\*17</sup>。相踵ぐ激甚な疫の流行に当時の民力は著しく殺がれ、農耕や脩調に要する労働力だけでなく、辺境の鎮定に派遣すべき兵力にまで影響を及ぼしたことは、緒嗣が前言に続いて「丁壯之余、猶未<sub>二</sub>休息<sub>一</sub>、是知民窮兵疲、而守<sub>レ</sub>不可<sub>レ</sub>止、忽有<sub>二</sub>不虞<sub>一</sub>、何用支防」と述べていることよりしても明らかであろう。

当時流行した疫の種類については、前時代と同様、詳細を欠く点が多い。しかし疫の月別発生数でうかがえば図1に示されているように夏季にピークを描いているので、常識的に考えて消化器系伝染病が主体をなしていたと考えられ、事実貞観三年（861）には、初めて“赤痢”という具体的病名が登場している<sup>\*18</sup>。

瘡（皰瘡・天然痘）は少なくとも弘仁五年（814）および仁寿三年（853）の2回、全国的な流行があり<sup>\*16-③</sup>、後者の期間には和気貞臣、成康親王などの宮廷人までその犠牲になっている。さらに病名の明らかにされている疫疾に“咳逆”があり<sup>\*19</sup>、貞観年間、

2度にわたり京師をはじめ全国に蔓延してその感染の速さと症状のすさまじさは貴賤を均しく恐慌状態に陥れた<sup>\*20</sup>。ことに初回の流行時には該疫が相踵ぐ政変に冤罪を被って横死した早良皇太子、伊予親王、藤原仲成らの怨魂の祟りと信じられ、数度に亘り御霊会や鎮謝の法要を営んでいるが、2回目には渤海国使が毒気を海外より持ちこんだものと、病因を冷静に把握しているのが興味深い<sup>\*20②</sup>。

前報でも論じたように、疫と飢との間に関連性の存在することは十分考え得るところであり、本報の調査期間内でも各史書を通じて前後9回にわたり“飢疫”の表現がなされている。他方、“旱疫”または“疫旱”という記載がこれを上廻って796年以降11回にも及んでいるのは一考に値しよう。今日の常識よりすれば、特に夏季高温多湿で病原体の繁殖に好適なわが国の風土において、旱天、すなわち乾燥状態の持続と、疫、すなわち伝染病原体の淫浸を直接結びつける接点を筆者らは見出すことができない。旱疫の実態については、さらに考究の機を得たい。

### D 災について

この時代はまた、衆庶の生活を困苦に陥れ、農業生産に大きな障害を与えたと推察される各種災害も異常に多かった時期で、既述のようにこの面でも全有史期を通じ最悪の状態であったといえよう。件数の比較だけで、その質的軽重を論ずるのはいささか失当の謗りを免れないであろうが、表3に拠っても各種災異の発生係数のほとんどは大きく前時代のそれを上廻っており、とくに飢・疫と相関性の高い旱・風・霖および洪水などの件数増加は著明である。これらの月別発生数は図2のとおりで、やはり前時代と傾向を一にして稲の出穂・分けつ期の早害と、開花・収穫期の風雨が最も切実な損害の原因をなしたことが了解される<sup>\*21</sup>。

地震の記録は件数としては極めて多いが、その大部分は被害を伴わない程度の有感地震であったと考えられ、多少なりとも実害を併記したものは至って少ない。その中であって天長四・七・十二（827. 8. 11）にはじまり、漸次減衰しつつも翌五年半ば頃まで続いた群発地震の克明な記録（類史・一七一）は、別な観点からも有益な資料となるであろう。

またこの時代は全国的に火山活動が活発で、3度（800, 802, 864）にわたる富士山の噴火をはじめ、豊後鶴見岳（867）、肥後阿蘇山（867）、出羽鳥海山（871）、薩摩開聞岳（874, 885）など各地の火山活動が記録されており、噴灰による農業被害や気象異変も

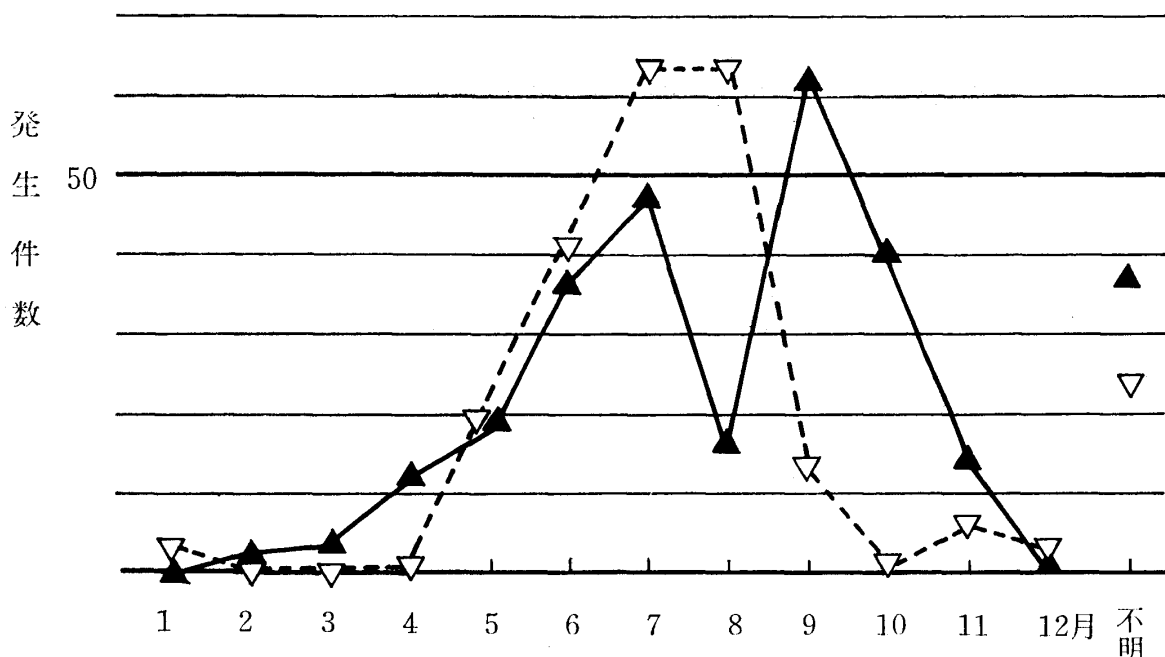


図2 各史書に記録された旱害 (▽) および水害 (▲) の月別発生数

することながら、心理的にも、迷信深い当時の庶民に不安と動揺を与え、暗澹とした世情の醸成に拍車的な影響を与えた点も見逃すことができないであろう。

#### IV む す び

既述のように、この時代の飢・疫・災が、いずれも前時代にまして京中ならびに畿内諸国で集中的に発生しているのは注目すべき現象である。その理由として、この種災異が辺境ないし遠隔諸国においてよりも、膝許の首都圏に発生した方が政府にとってより重大かつ深刻な事態として評価された点も挙げられるが、恒久的な首都を意図して建設された平安京とその後背地としての五畿内には、わが国が嘗て経験したことの無い人口集中（都市化現象）が既に当時より起こっていたためではないか、とも推察される。ことに平安京は雄大な構想にもとづいて営まれたとはいえ、余りにも規矩に拘わり自然条件を無視して造成された人工都市であった故に、当初から生活環境条件の劣悪な低湿地域を疆内に抱えていた。生活基盤の弱い貧民たちは勢いこのような地区に追い込まれて密集雑居を余儀なくされ、相踵ぐ災害をもろに蒙って、疫病蔓延の温床と化する結果を招いたのではないかと考えられる。京中住民への救恤は遷都後間もない延暦十五年（796）以降数え切れぬ程行われているが、このような政府の特恵的施策にも拘らず、住民の生活水準も衛生環境も向上を示した兆は全くうかがわれない。

それにつけても、この時代の歴代政府の民生に対する無策振り目は目を覆うばかりである。各種災異の間断無い来襲に苦しむ庶民に対して、政府の行った具体的な施策は、精々官庫を開いての賑給や出挙程度で、積極的な治水灌漑などの対策を行った記録は数える程しか見出せない。人々をさいなむ自然の猛威に対しては、ひたすら百僧を僱請して仏前に加護を祈り、諸神に遣使して奉幣鎮謝するばかりであった。見方を変えれば当時の官人たちは諸災異に対するこのような謂わば“形而上的”対応こそが、朝廷の本来果すべき第一義的な責務であり、物糧の恵恤など具体的施策はむしろこれに付帯する副次的なものと心得ていたのではないかとも思えてくる。

現代の尺度を以て千余年前の当時を批判するのは必ずしも当を得ていないだろうが、漸く硬直化の兆しを示しはじめた律令体制の下で、民情に明るく実務的才幹を具えたテクノクラートにその羽翼を伸ばし得る場を与えられていなかったことが、理財、民政の貧困化の一因となったことが十分に考えられる。

ともあれ、今日のわれわれならば一日として耐えられそうもない劣悪な生活環境下で、瀕死の痛手を蒙りつつも生命の灯を絶やさなかった当時の庶民の強靱な生活力に、改めて驚異を感じる次第である。

#### 引用文献

- 1) 浅見益吉郎：本誌，34，32（1979）。

- 2) 国史大系編集会編：“日本後紀”，“続日本後紀”，“日本文徳天皇実録”，“日本三代実録”・前後篇（吉川弘文館，1934）。
- 3) 佐伯有義編：“校訂標注 日本後紀逸文”〔“増補六国史” 6〕（朝日新聞社，1941）。
- 4) 国史大系編集会編：“類聚国史” 第1～4，編年索引（吉川弘文館，1933）。
- 5) 同上編：“日本紀略” 前篇（吉川弘文館，1929）。
- 6) 京都市参事会編：“平安通史”（1895〔復刻版・新人物往来社，1977〕）。
- 7) 小鹿島果：“日本災異志”（1894〔復刻版・思文閣，1973〕）。
- 8) 中島陽一郎：“飢饉日本史”（雄山閣，1976）。
- 9) 富士川 遊：“日本疾病史”（1912〔再刻版・平凡社，1961〕）。
- 10) 小鹿島果：既掲書付録（1894）。

## 文 注

- \* 1 以下年号および和暦による年月日は漢数字で、西暦年数および太陽暦による年月日は算用数字で示す。和暦年月日の太陽暦への換算は、歴史研究会編：“日本史年表”（岩波書店，1966）付録3の対照表に記載された各暦年元旦の日付を基準とした。
- \* 2 凶作がただちに飢饉の招来を意味するものではないので、両者を一括して集計することは必ずしも当を得ているとは言えないかもしれない。しかし食生活という観点に立てば、凶と飢は明らかに因果関係で結ばれており、かつ凶作による食糧事情の悪化と飢饉状態の発生の間には明確な境界線を画することができないとも考えられるので、本報では、両者に関する記録を区別せずに集計した。
- \* 3 本報に採録した“災”の内容は早ばつ、霖雨、洪水、地震、火災および虫害など多岐にわたっているが、いずれも農業生産や住民の生活に直接的な被害ないし悪影響を及ぼしたと推定されるものだけに限定した。とくに地震の発生はどの史書にも極めて多数記録されているが、山崩れや家屋倒壊などの被害が併記されているものに限り拾摘した。火災についても、穀倉や民家、山林などの大規模火災だけを採り、官庁や社寺などの炎上記録は、直接住民の生活に関係しなかったものと見なして集計から除いた。
- \* 4 根拠とした各史書はそれぞれ編集方針を異にしているので、飢・疫・災などの記載にかなりの精粗が見られしかも既述のように後紀欠巻部の復元も不完全である。さらにこれらの発作件数の多寡は発生した被害の質的な深刻度とは一応無関係であるので、本報に掲げる集計数値は、単にその概勢を把握するための参考としての意義を持つだけであろう。
- \* 5 前報は95年間、本報は96年間とほとんど同一年数なので、表2では補正を行わずに比較を行った。

- \* 6 小鹿島は飢年に限り大飢年を指定している。筆者らは豊・飢・疫・災の程度を判断するための基準も別に存在しないので、各史書の記載内容を検討して主観的に判定した。
- \* 7 〔以下の注に引用する各史書原文では、難解な古漢字で現用の同義漢字のあるものは適宜これに置き替えた。〕  
延暦廿四・十二・七（806・1・4）「是日……有<sub>レ</sub>勅。令<sub>下</sub>参議……藤原朝臣緒嗣。与<sub>二</sub>参議……菅野朝臣真道<sub>一</sub>。相<sub>中</sub>論天下徳政<sub>上</sub>。于時緒嗣議云。方今天下所<sub>レ</sub>苦軍事与<sub>二</sub>造作<sub>一</sub>也。停<sub>二</sub>此兩事<sub>一</sub>。百姓安<sub>レ</sub>之……」（後紀・一三）。
- \* 8 承和九・十・十四（842・11・23）「勅<sub>二</sub>左右京職東西悲田<sub>一</sub>並給<sub>二</sub>料物<sub>一</sub>。令<sub>レ</sub>焼<sub>二</sub>斂嶋田及鴨河原等鬻饅<sub>一</sub>。惣五千五百余頭。」（続後紀・一二）〔嶋田の地、不詳〕。
- \* 9 弘仁四・五・廿五（813・6・30）「勅。治国之要在<sub>二</sub>於富<sub>レ</sub>民。民有<sub>二</sub>其蓄<sub>一</sub>。凶年是妨……今諸国之吏深背<sub>二</sub>委寄<sub>一</sub>。……無<sub>レ</sub>心<sub>二</sub>撫字<sub>一</sub>。因<sub>レ</sub>此黎元失<sub>レ</sub>業。飢饉自隨。非<sub>レ</sub>縁<sub>二</sub>災妖<sub>一</sub>。常告<sub>二</sub>民飢<sub>一</sub>。仍<sub>二</sub>年々賑給<sub>一</sub>。倉廩殆虚。若有<sub>二</sub>災害<sub>一</sub>何以相濟。……宜自今以後。非<sub>下</sub>有<sub>二</sub>田業損害<sub>一</sub>。及有<sub>二</sub>疾病等<sub>上</sub>。不<sub>レ</sub>得請<sub>二</sub>賑給<sub>一</sub>」（類史・一七三）。
- \* 10 ①延暦廿二・六・四（803・7・3）「勅。去年不<sub>レ</sub>登。民業絶乏。富贍之輩。唯有<sub>二</sub>余儲<sub>一</sub>。糶則要以<sub>二</sub>貴価<sub>一</sub>。借則責<sub>二</sub>之大利<sub>一</sub>。因<sub>レ</sub>茲貧民弥貧。……」（類史・八四）〔糶は米を売ること〕。  
②弘仁十・二・廿（819・3・24）「公卿奏曰。頻年不稔。百姓飢饉。倉廩空尽。無物<sub>二</sub>賑稟<sub>一</sub>。窮民臨<sub>レ</sub>飢。必忘<sub>二</sub>廉恥<sub>一</sub>。臣等伏望。遣<sub>下</sub>使畿内<sub>一</sub>。実<sub>二</sub>録富豪之貯<sub>一</sub>。借<sub>中</sub>貸困窮之徒<sub>上</sub>……」（類史・八四）。  
③貞観十二・五・廿六（870・7・2）「河内国年穀不<sub>レ</sub>登。民苦<sub>二</sub>飢饉<sub>一</sub>。太政官処分。借<sub>二</sub>境内富豪貯稻一万三千束<sub>一</sub>。班<sub>二</sub>給百姓<sub>一</sub>。待<sub>レ</sub>秋返給。」（三実・一八）。
- \* 11 ①大同四・五・一（809・6・21）「始制。留<sub>下</sub>五位以上不輸<sub>二</sub>義倉<sub>一</sub>者封禄。」（紀略・前一四）。  
②元慶五・五・九（881・6・13）「制。拘<sub>下</sub>留不<sub>レ</sub>輸<sub>二</sub>義倉<sub>一</sub>三位以上家司季禄<sub>上</sub>……」（三実・三九）。
- \* 12 貞観九・四・廿二（867・6・2）「東西京始置<sub>二</sub>常平所<sub>一</sub>。出<sub>二</sub>官米<sub>一</sub>而売<sub>レ</sub>之。米一升直新銭八文。京邑之人来買者如<sub>レ</sub>雲。是時穀価騰躍。内外飢饉。米一石直新銭一千四百文。由<sub>レ</sub>是。官売以救<sub>二</sub>俗弊<sub>一</sub>焉。」（三実・一四）。
- \* 13 ①斉衡元・三・廿三（854・4・27）「石見国奏請。以<sub>二</sub>不動稻三万五千余束<sub>一</sub>。賑<sub>二</sub>給飢民<sub>一</sub>。許<sub>レ</sub>之。」（文実・六）。  
②元慶二・一・十五（878・2・24）「勅。以<sub>二</sub>播磨国不動穀六千石<sub>一</sub>。転充<sub>二</sub>和泉国<sub>一</sub>。班<sub>二</sub>給百姓<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>去年旱飢<sub>一</sub>也。」（三実・三三）。  
③元慶二・二・廿八（878・4・8）「勅。備前国不動穀一万石。運<sub>二</sub>充河内国<sub>一</sub>。班<sub>二</sub>給百姓<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>去年旱損民多飢餓<sub>一</sub>也。」（三実・三三）。  
④元慶二・五・二（878・6・10）「摂津国旱飢。詔転<sub>二</sub>運播磨備前兩國不動穀各三千石<sub>一</sub>。班<sub>二</sub>賦百姓<sub>一</sub>。」



(三実・三三)。

- \* 14 貞観八・十二・八 (867・1・21) 「禁下五畿国非有ニ裁許一。輒開中用不動穀上。若不ニ勤慎一。罪以ニ違勅一。」(三実・一三)〔輒：いつでもすぐにの意〕。
- \* 15 ①延暦廿三・十・十 (804・11・19) 「詔曰……今年波年実豊稔<sup>スナワネ</sup>人々産業毛取収<sup>ス</sup>在。……」(後紀・一二)。
- ②弘仁二・五・八 (811・6・6) 「勅……今官庫之貯。頗有ニ盈余……」(後紀・二一)。
- ③弘仁四・十・三 (813・11・3) 「奉ニ幣於名神一。報ニ豊稔一也。」(紀略・前一四)。
- ④弘仁五・八・廿九 (814・10・19) 「詔曰……頃年以降。春耕候<sup>レ</sup>花。不<sup>レ</sup>謬<sup>ニ</sup>濯枝之潤一。秋稼垂<sup>レ</sup>穎。可<sup>レ</sup>余<sup>ニ</sup>栖畝之糧一……朕思<sup>下</sup>膺<sup>ニ</sup>斯嘉賜一。寄<sup>ニ</sup>中実於百神一。欣<sup>ニ</sup>彼豊稔一。報<sup>中</sup>勤勞於百姓上……」(後記・二四)。
- ⑤弘仁七・七・廿 (816・8・20) 「勅。……今聞。今茲青苗滋茂。宜<sup>下</sup>敬<sup>ニ</sup>神道一。大致中豊稔上。庶使<sup>ニ</sup>嘉穀盈<sup>レ</sup>畝。黎元殷富一。……」(類史・一一)。
- ⑥弘仁十二・八・三 (821・9・7) 「勅。今嘉穀垂<sup>レ</sup>穗。多稔豊熟。……」(類史・一一)。同年八・十八 (9・21) 「奉ニ幣名神一。報ニ豊稔一也。」(紀略・前一四)。
- ⑦承和五・九・廿九 (838・10・25) 「……今茲畿内七道。俱是豊稔。五穀価賤……」(続後紀・七)。
- \* 16 全国的な疫の流行を記載した数例を以下に挙げる。
- ①大同三・五・十 (808・6・11) 「詔曰。……頃者天下諸国飢餓繁興。疫癘相尋。多致<sup>ニ</sup>夭折一。……」(後記・一七)。
- ②天長十・六・八 (833・7・2) 「勅曰。如<sup>レ</sup>聞。諸国疫癘。夭亡者衆。……」(続後紀・二)。
- ③仁寿三・二 (853・3・4) 「是月。京師及畿外多患<sup>ニ</sup>瘡瘡一。死者甚衆。天平九年及弘仁五年有<sup>ニ</sup>此瘡患一。今年復不<sup>レ</sup>免<sup>ニ</sup>此疫一而已。」(文実・五)。

④貞観六・十一・十二 (864・12・18) 「勅令<sup>下</sup>ニ五畿内并山陽南海兩道一。預<sup>ニ</sup>鎮<sup>ニ</sup>謝<sup>ニ</sup>疫癘一。兼<sup>中</sup>賑<sup>ニ</sup>若大乗上……」(三実・九)。

- \* 17 ①大同三・一・十三 (808・2・16) 「遣<sup>レ</sup>使埋<sup>ニ</sup>斂京中骸骨一。勅。頃者疫癘方熾。死亡稍多。庶資<sup>ニ</sup>惠力一。救<sup>ニ</sup>茲病若一。……」(類史・一七三)。
- ②大同三・二・四 (808・3・8) 「勅。今聞。往還百姓。在<sup>レ</sup>路病患。或因<sup>ニ</sup>飢渴一。即致<sup>ニ</sup>死亡一。……又頃者疫癘。死者稍多。屍骸無<sup>レ</sup>斂。露<sup>ニ</sup>委路傍一。甚背<sup>ニ</sup>掩<sup>ニ</sup>該埋<sup>ニ</sup>斂之儀一。宜<sup>レ</sup>令<sup>下</sup>諸国巡檢看養。一依<sup>ニ</sup>先格一。所<sup>レ</sup>有之骸。皆悉収<sup>ニ</sup>斂上」(類史・一七三)〔斂は骨に付着した残肉〕。
- \* 18 貞観三・八 (861・9・10) 「是月……患<sup>ニ</sup>赤痢一者衆。十歳已不男女兒染<sup>ニ</sup>苦此病一。死者衆矣」(三実・五)。
- \* 19 富士川<sup>9)</sup>によれば咳逆は当時“シワブキヤミ”と和訓され、今日のインフルエンザに該当する疾患である。
- \* 20 ①貞観五・一・廿七 (863・2・22) 「賑<sup>ニ</sup>給京師飢病尤甚者一。自<sup>ニ</sup>去年末一。至<sup>ニ</sup>于是月一。京城及畿内畿外。多患<sup>ニ</sup>咳逆一。死者甚衆矣」(三実・七)。
- ②貞観十四・一・廿 (872・3・7) 「是月。京邑咳逆病発。死亡者衆。人間言。渤海客来。異土毒氣令<sup>レ</sup>然焉一。」(三実・二一)。
- \* 21 ここで注意を要するのは、各史書に記載された事件の日付である。すなわち、当時の交通・通信事情よりして、諸国より朝廷への報告は京師までの距離に比例して日数を要したのは当然である。例えば、天長七・一・三 (830・2・3) 出羽に発生した地震の報告は当時の至急便であった駅伝奏を以てしても、秋田城より京師へ26日間を要している。従って各史書の記載日付を必ずしも当該事件の発生日と見做し得ないが、適切な修正手段も見つからないので、図1～2の月別類別は各史書記載日付に拠った。